



**Data**

監督: 濱口竜介  
 脚本: 田中幸子、濱口隆介  
 原作: 柴崎友香『寝ても覚めても』  
 (河出書房新社刊)  
 出演: 東出昌大/唐田えりか/瀬戸  
 康史/山下リオ/伊藤沙莉  
 /渡辺大知/仲本工事/田  
 中美佐子

### ■ショートコメント■

◆キネマ旬報9月下旬号では10～29ページにわたって冒頭に大型特集を組み、また、“REVIEW 日本映画&外国映画”では3人の評論家がそろって星5つと異例の高評価をしているのが本作。そうなれば、こりゃ必見！と考えて映画館へ。

濱口竜介監督の『ハッピーアワー』第1部、第2部、第3部は素人(?)俳優による「アラフォー4人組」の日常を描いた5時間17分の「大作」だったが、『ハッピーアワー』というタイトルとは正反対のアラフォー4人組のドロドロした夫婦関係や男関係が面白く、DVD3枚組を一気に鑑賞し星5つをつけた(『シネマ37』117頁)。

◆本作はそんな濱口監督が第71回カンヌ国際映画祭のコンペティション部門に初参加した作品だから、要注目。さらに、8月12日に観た『2重螺旋の恋人』(17年)は双子の兄弟に1人のヒロインが絡む、いかにもフランソワ・オゾン監督らしいサスペンス恋愛劇(?)だったが、本作では東出昌大が1人2役で麦(ばく)と亮平という“そっくりさん”を演じるらしい。そして、その恋人朝子を演じるのが、本作が本格的映画デビューとなる唐田えりか。予告編で観た限り透明感のある魅力的な女優さんだが、さて本番では・・・?

◆“濱口メソッド”と呼ばれる濱口監督の映画作りでは、素人俳優を起用した『ハッピーアワー』と同じような“ワークショップ”が行われたらしい。そのため本作では、若手ながら既に演技派俳優になりつつある東出に対してもそれが行われたから、彼はかなり面くらったらしい。なぜなら、そこで主として行われたのは、感情を入れず抑揚もイントネーションも付けず、すべての作為を排してただただ台詞を読む“本読み”だったからだ。そのため、彼は「頭でっかちな僕にとっては難しいものでした。」と語っている。

本作を観れば、最初に登場してくる麦のセリフ回しの抑揚の無さがよくわかるし、後半から登場してくる亮平も、それは同じだ。2015年のNHK大河ドラマ『花燃ゆ』で久坂玄瑞役を演じた東出は躍動感に満ちていたし、『聖の青春』（16年）での東出はセリフは少ないもののキリリとした棋士としてのたたずまいを見せていた。それに比べて、濱口演出を受けた本作における東出の魅力は・・・？

他方、今時こんな天然の女がホントにいるの？そう思ってしまう唐田も同じ濱口メソッドによるワークショップを経てスクリーン上に登場しているから、セリフ回しにおけるイントネーションのなさは東出と同じだ。これがすばらしいという人がいるのかもしれないが、私には如何なもの・・・？私は最初から、そのセリフ回しの奇妙さが目障りに・・・。

◆双子やそっくりさんの男2人に1人の女性が絡む恋愛モノはたくさんある。柴崎友香の『寝ても覚めても』を映画化するについて、濱口監督がどこまで原作を修正したのかは知らないが、麦との出会いと麦が消えた後の亮平との出会い、そして新たな恋の進展は、朝子の友人であるマヤ（山下リオ）や春代（伊藤沙莉）、そして亮平の仕事上の同僚である耕介（瀬戸康史）らの“応援団役割”もあって、それなりにまっとうに進んでいく。

しかし、それだけでは何の劇的展開もないから、本作ラストに向けては、今は人気モデルになってマスコミにもはやされている麦が再度登場してくることになる。そして、そこから本作のクライマックスに至るわけだが『2重螺旋の恋人』のクライマックスと同じように、その展開は如何なもの・・・？

◆キネ旬9月下旬号で、上野昂志は「日本映画では極めて稀な純粋恋愛映画」と題して本作を評論しているが、本作クライマックスにみる朝子の行動をそんな風に言っているの？もっとも、彼は「わたしが、本作を、純粋恋愛映画ではないか、それも日本映画ではきわめて稀な、と考えたのは、恋愛において朝子を縛るものは何もなく、彼女の行動を律するのは、ただ彼女の感情のみであるという点によってである。」とも書いているから、しっかり彼の真意を読み取る必要があるが、私には朝子の身勝手さが突出しているだけとしか思えない。そのため、思わず心の中で「そんなバカな！」とつぶやいているほどだったから、朝子にも本作にも全然共感できなかった。そのため、私の本作の評価は星3つがせいぜいだが・・・。

2018（平成30）年9月12日記